

2021年10月30日

年間第31主日

菊地功大司教 メッセージ

申命記は、「聞け、イスラエルよ」で始まる掟の言葉を記しています。旧約の掟の中心となる一節であり、イエスご自身が「第一の掟」として言及していることが、マルコ福音には記されています。

全身全霊をあげて、唯一の神を愛することを最も大切な掟であるとする主イエスは、同時に、「隣人を自分のように愛しなさい」というレビ記に記された言葉を、それに続く第二の大切な掟であると教えます。すなわち、唯一の神を愛することは、その神が創造された賜物であるいのちを生きる自分自身を愛することであり、それは同時に、同じいのちを生きている隣人を愛することをも意味するのですから、この三つの愛は、切り離すことは出来ません。

ヘブライ人への手紙は、創造主である神ご自身が、わたしたちへの愛を、自らの命を犠牲にしてまで具体化されたことを記し、完全な救いのために永遠に執り成してくださる祭司である主により頼むようにと呼びかけます。

いのちの与え主である神を信じるわたしたちキリスト者は、人間の性格として優しくあるから他者を愛し、助けを求める人に手を差し伸べるものではありません。わたしたちが信じる神が、まずいのちを賭してわたしたちへの愛に生きたからこそ、神から愛されてこのいのちを与えられ、生かされているわたしたちは、当然のこととして、隣人を愛するのです。隣人愛は優しさではなく、神から受けた愛の反映です。

神からわたしたちが受けている愛を、被造物として最も美しく反映しているのは、わたしたちの母である聖母マリアであります。教皇レオ13世によって、10月は聖母マリアにささげられた「ロザリオの月」と定められました。10月も終わりを迎えますが、その意味を振り返ってみましょう。

教皇パウロ六世が1969年に発表された使徒的勧告「レクレンス・メンシス・オクトーベル」は、冒頭で、「諸民族の心と精神の和解によって最後には真の平和が世界に輝くよう、幸いなるおとめマリアの助けを願うために、十月にロザリオを唱えることを強く勧めます」と記しています。

10月7日のロザリオの聖母の記念日は、1571年のレパントの海戦でのオスマン・トルコ軍に対する勝利が、ロザリオの祈りによってもたらされたとされていることに因んで定められています。歴史的背景が変わった現代社会にあっても、ロザリオは信仰を守り深めるための、ある意味、霊的な戦いの道具でもあります。

とりわけ昨年から今に至る感染症による困難な状況の中で、わたしたちを祈りのうちに霊的な絆で結び、さらには聖母の取り次ぎによって、聖母とともにこの困難に立ち向かう霊的な力をいただくためにも、ロザリオはわたしたちにとって、信仰の危機に立ち向かう武器であるとも言えます。

教皇パウロ六世は、使徒的勧告「マリアーリス・クルトゥス」で、「(マリアが) 信仰と愛徳との両面において、さらにまた、キリストとの完全な一致を保ったという点において、教会の卓越した模範であると仰がれている」(16)と指摘します。

ロザリオの祈りを唱えることで、わたしたちを結び合わせているキリストの体における神秘的一致へと導かれ、どこにいても、いつであっても、ひとりでも、複数でも、ロザリオを唱えることで、わたしたちは聖母マリアがそうであったように、キリストの体において一致することが出来ます。

心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして神を愛するわたしたちは、聖母に倣って、キリストと一致しながら、命を守る愛の業に励みたいと思います。